
7 「代替医療における紫イペを中心とする機能性食品の役割」
大森内科・アレルギーくりにつく
大森 隆史

20 世紀後半に飛躍的進歩を遂げた西洋医学は、21 世紀も遺伝子を中心とするテーマで展開するシナリオが既に出来上がっている。そのシナリオのト書きには遺伝子治療、遺伝子構造解析を元にした新薬の開発などが書きこまれている。

しかし、その筋書きの先は必ずしもハッピーエンドにはなっていない。西洋科学文明を土台にした分析的手法では解析不可能な課題が明らかになってきたからだ。それは、最近の科学テーマで言えば、「複雑系」という概念が医学、医療にも必要となっていることによる。免疫系にしても複雑なネットワークを構成しながら、人間の生命活動の維持に役立っている。そんな免疫系の破綻によって引き起こされた疾病に対し、西洋科学技術を元にした薬剤や治療技術は十分な力を発揮し得ない。

複雑系の存在としての人間に対しては、複雑系の自然界からの産物こそがその有効性を発揮することが分かってきた。言い換えれば、機能性のある食品である。西洋科学的分析技術によっても当然その効果は評価されるものであるが、機能性食品というものは複雑系の産物であり、その働きには分析的技法を越えるものが存在することは間違いない。

紫イペ、アラビノキシラン、田七人參、サメ軟骨、紅雪冬夏、コッカス、プラセンタ抽出物。これらのどれを取っても自然界が創りあげた複雑系の産物である。今回、演者はこれら機能性食品の人知を越えた働きの一部を臨床データから報告する。